

ザ・ボイスメール 10月号

『赤毛のアン』を訪ねて④ 「世界でもっとも美しいところ」

本年は名作『赤毛のアン』の出版からちょうど100年。日本でも愛読者は多く、NHKのテレビ番組をはじめ、さまざまな企画が生まれ、旅行社はキャンペーンツアーを催しています。私も作品の舞台となった現地の「今」を訪ね、この夏、カナダのプリンスエドワード島に飛びました。

6月半ば。グリーンゲーブルズのりんごの花がちょうど満開でした。孤児院にいたアンが初めてグリーンゲーブルズに着いたのも6月。りんごの花が白く咲きあふれていたころでした。一人で置き去りにされた鉄道駅から、マシューが手綱をとる馬車でやってきたのです。

——ときは19世紀末。ところはカナダの北部東海岸にあるプリンスエドワード州。島のアボンリー村（現キャベンディッシュ村）にグリーンゲーブルズという農家の家がありました。グリーンゲーブルズとは「緑の切妻屋根」との意味です。

家には60代のマシュー・カスバートと50代のマリラ・カスバートという独身の兄妹が暮らしていました。子どものいない二人は、年老いてくるマシューの農作業の手伝いのために、孤児院から男の子を引き取ろうと考えました。ところが、手違いでやってきたのは赤毛でそばかすだらけのやせっぽちの女の子だったのです。

アン・シャーリー。11歳。

マリラは、女の子は農作業の役に立たないと追い返そうと考えます。ところが、アンの生き生きとした明るさ、可愛いおしゃべりにまずマシューがとりこになり、ほどなくマリラも彼女の生い立ちに同情、不思議な個性に魅せられ、引き取って育てることになったのです。

アンは島の美しい自然とマシューとマリラの愛情のなかですこやかに育っていきます。学校では同級生のダイアナとの間に友情を培い、赤毛をからかわれた男子生徒のギルバートと反目。担任教師、牧師夫妻、そして周囲の多くの大人たちからの感化で、彼女は優しく賢い16歳の娘へと成長していきました。

半面、それまで世間づきあいが苦手で、兄妹だけでさびしく生きてきたマシューとマリラも、アンを育てていくなかで、人を愛する喜び、人から愛される幸せを知って劇的に変化、心豊かな大人へと成長していくのです。

美しいものに憧れる乙女心。数え切れない失敗。それでも“想像力”を駆使し、決して希望を失わず、すべてに前向きに生きていくアンに読者は感動し勇気づけられます——

ハウスには各国からの見学者が押しかけていました。地元カナダの各地。お隣のアメリカ。ヨーロッパは主に東欧の国々。アジアは日本、中国、韓国からが多い。日本からは若い女性と中年の婦人が目立っていました。それぞれ少女また青春時代に読んだアンの魅力

に惹かれて訪ねてきたようです。

こうしたなか、皮肉にも、プリンスエドワード島は別格として、カナダの一般市民の間ではそれほど意識が高くないのには驚きました。成田から現地への直行便はありません。乗り換えのためにトロントで1泊。空港からホテルまで乗ったタクシーの運転手は、私のカナダ訪問の趣旨を聞くと言ったのです。

「エッ グリーンゲートルズって何ですか？」。

わざわざ東京から訪ねてきたこちらが拍子抜けするような質問でした。もちろん、日本でも読んでいない人も大勢います。

実を言うと私自身も最初は少し恥ずかしい気持ちもありました。

「いい年をしたオジサンが、なんでわざわざ少女物語の舞台を訪ねるんだい？」。定年8年目。シルバー人材センターで、JR昭島駅の駐輪場の自転車整理をしている私に、周囲はこんな言葉も投げかけてきたのです。でも、改めて再読してみると、作品は若い女性ばかりでなく、男性も含めたすべての大人が読むべき本、また読み直してよい文学、との確信を抱くようになったのです。とりわけ、身体も心も枯れつつあるシニア世代は！ 主人公アンの想像力と楽しいおしゃべり。何事も前向きにとらえ、はつらつとした姿からは、みずみずしい生きさえも与えられるような気になるからです。

訪れが遅い北国カナダの夏。“腹心の友”ダイアナと通った「恋人の小径（みち）」は今が新緑のまっただなかでした。木々のこぼれ日が路面に映り揺れています。高い樹木が密集した「お化けの森」では、倒れた古木がいかにもその趣をかもし出していました。

グリーンゲートルズの家は、実際に作者モンゴメリーの親戚が住んでいたものでした。現在は小説の記述どおりに再現され、100年前の息遣いが感じられます。2階のアンの部屋には明るい色の少女用ベッドのほか、マシューがアンに贈った、袖がふくらんだパフスリーブの衣装もかけてありました。別棟(むね)の納屋には当時の農作業道具が陳列され、中庭に置かれた馬車が100年前を忍ばせています。

手前の広い駐車場には大型の観光バス4台と30台ほどの自家用車。「シーズンになると、この2倍から3倍になるんです」と係員。受付の建物の中では、作者ルーシー・モード・モンゴメリーが使ったタイプライターの展示があり、短時間の紹介映画も見られるようになっていきます。

キャベンディッシュ（アボンリー）村には、モンゴメリーの生家、また彼女が働いていた郵便局や墓地もあります。やや離れたところにはアンが名づけた「輝く湖水」、その向かいにはグリーンゲートルズ博物館が緑のなかに落ち着いていました。

島は「波間に浮かぶゆりかご」の形をしています。セントローレンス湾に面したキャベンディッシュへは、島の反対側にある州都シャーロットタウンから車で約40分。道路の両側には、赤土と緑ののどかな田園風景が広がり、まさにアンをして「世界で最も美しいところ」と言わしめた光景でした。

訪問にあたって、私は本年4月からNHK教育テレビで始まった「3ヵ月トピック英会話『赤毛のアン』への旅——原書で親しむAnneの世界」を視聴するほか、松本侑子講師が直接講義するクラスにも出席しました。6月初めには、劇団四季が主宰するミュージカル「赤毛のアン」を鑑賞。そして島に着いた翌々日からは物語の舞台の本場でのミュージカル公演が始まったのです。

毎年、夏になると催されてきた公演は今年で44回目。100周年の本年は特に力が入っている、といいます。1968年から足かけ10年間アンを演じ、今はロンドンに住む最初のアイランド人女優も来島していました。

ガラ公演に先立って、全キャストが揃ってのサイン会と記者会見が行われました。私は前日のプレ公演の感想と日本での“アンブーム”を伝えた後、主役のアン、準主役のマッシュウにインタビューしました。

アン (アミー・ワリス) :「記念すべき年の主役をいただいて光栄です。おしゃべりでチャーミング。そして勇気もある。どこまでも希望を失わないアンは、永遠に私たちの“生き方の鏡”だと思います」

マッシュウ(サンディ・ウィンスビー) :「高齢になるにつれて、身体だけでなく心まで枯れてしまう人も多い。年を取るほどにアンのような『心のみずみずしさ』が必要になってくると思う。作品は少女たちだけでなく、すべての大人に通ずることを訴えたい」

州政府は本年を「アン 100周年の年」と決めています。空港や街のあちこちにポスターや案内板が目につき、書店には「アン特集」の本や写真が並べてありました。